エンディングロール

成平　一平太

　箕形孝次朗（みかたこうじろう）、七十六歳。天涯孤独の独居老人となって十七年になる。

　体調の変化に気づき、医師の診断を受けた結果、肺が癌に侵されていることがわかった。ステージⅢに入ったところだと診察をした若い医師がＣＴ画像を指さしながら丁寧に今後に置ける処置について説明をしてくれた。

「先生、わたしは七十六歳です。医術が進歩したことによって命を永らえることにどれほどの意味があるのでしょう」

　わたしは、若い医師が勧めてくれる片肺の一部を除去する提案を断わった。手術によって新に私が手にすることができるのは精々が四年か五年。その年数にどれほどの意味があるのだろう。躰にメスを入れてまで勝ち取らなければならないほどの価値があると私には思えなかった。どれほど生きられるのかは神が決めればいい。状況によっては、自分の意志で終える事だってあるかもしれない。それまでは、痛みにのたうち回ることになっても受け入れるしかない。おそらくは残り一年と少し。来年の桜を堪能することはできても紅葉までは贅沢なのかもしれない。

　この先のわたしの人生は、痛みとの戦いの日々になる。どれほどの痛みなのかはわたしには想像出来ない。泣き叫びながら、七転八倒するほどの痛みなのかもしれない。その痛みに耐え、向き合うほどの覚悟があるわけではない。それでも躰にメスを入れることはしないと決めた。若い医師が処方してくれる薬の種類がどれほどに増えようとも、その日がくるのを独りで迎える選択をわたしはした。

　わたしは、診断が下った月が変わらぬ内に相模湾に面した小高い山のエリアに居を移した。古くて小さくはあっても一軒家を買い求めた。何年も放置されていた空き家の雨戸を全て開放し、海風をこれでもかというほどに駆け巡らせた。埃やカビの匂いが消えるわけでもない。が、少しは改善されるだろうとの思いからだった。襖や障子は破れ、天井には水漏れの痕さえ見える。

百坪ほどの敷地に平屋造りの六畳三部屋に台所と風呂。シミはそのままとしても、自分の力で修繕できるとこ

ろは頑張ってみようと決めた。
歩いて五分くらいの処に隣家はあるがここも空き家になっている。坂道を十分ほど下った麓には二十数件の人家があるだけの小さな部落と言ってもいい。こんな家だからこそ、これまで住んでいた東京蒲田の住居を処分しての購入ではあったがじゅうぶんにお釣りがきた。
広すぎるほどの庭に、四季折々の野菜を育てることで新鮮な食物を体内に取り入れることが出来る。気の向くままに磯に降り、釣り糸を投げ込む。釣れさえすれば何だって良い。いや、必ずしも釣れなくても良い。日柄に任せて、ただ時が過ぎてゆけば良い。
十日に一度の割で、片道二時間を掛けてバスと電車を乗継いで若い医師のもとに通う。経過診察のためではあるが、処方薬を手にするための手段に過ぎない。わたしは、「手術は拒みましたが出来る限り痛みは取り除きたい」と、若い医師に訴えて痛み止めを処方してもらっている。今は、アセトアミノフェンを処方してもらっているが、みつき後にはモルヒネ経口薬を処方してもらう計画を練っている。痛みと闘う日々はもう少し先だ。モルヒネ経口薬を使う頃には往復四時間を掛けての通院は無理なことはわかっている。
いよいよの時には自身で命を絶つことも選択肢として考えてもいる。
幸いなことに、わたしが住む町では独居老人の福祉が行届いている。若者は、より大きな町を生活の場所にと出て行き、老人ばかりが住む町として有りがたくもない冠を拝してもいる。七十五歳以上の独居老人の家には安全確認の制度がある。一日の内に、何度も動かさざる得ない物にセンサーが取り付けられ、町役場直通のホットラインもある。住民票を蒲田からここに移した際に福祉課の担当者からその説明を受けた。町としては高齢の独居老人の移住は招かざる住民といったところではあるがむげに出来る住民でもない。生活保護の心配さえ無ければ有りがたい人口増であり住民税などの税を負担してくれる住民だからだ。この町にとってわたしはプラス要因の頭数となる。
わたしは、担当者に勧められるままに、ノートパソコンにセンサーを仕込んでもらった。わたしが必ずパソコンを開いて日々の出来事を綴っているからだ。センサーは、わたしがパソコンを二日開かなければ三日目の朝には町の職員が訪ねて来ることになっている。ホットラインとして、テレビの横に握り拳ほどの通信機を置くことにも同意した。いざと言うときにはボタ

ンを押すだけでいい。通話も出来なくはないがさほどの重要視はしていないそうだ。ボタンさえ押せば、遅くても三十分以内には町からだれかがやってくる。これらによって孤独死となっても四日以上の放置は避けられることになっている。さらに、身内のいないわたしは、万が一の時の財産も全てを町の一存で処分ができるようにと覚え書きにも署名捺印を済ませてある。簡単にいえば貨幣制資産の全てを町に寄贈となり、不動産においても容易に取り壊しの出来ることが目的となっている。もっとも、野辺送りも質素とはいえ町が代わって全てを執り行ってくれる。言うなれば、『余生を元気で過ごして下さい。万が一の時には町がエンディングのお手伝いをさせていただきます』と言っているも同じだ。わたしは、さすが老人の町と感心もした。もっとも、気を付けなければならないことが一つある。ゴミだ。生ゴミは、肥料として畑に埋めれば良い。燃える物は燃やせばいい。問題はプラゴミや空き缶などだ。月に一度は必ず十分歩いて決められた時間内に集積場まで運ばねばならない。そのためには自治会にも加盟する必要がある。絶対ではないが地元住民とのトラブルを避けるためにはやむおえない。

「箕形さん、自治会では祭りには役が順番で回ってくる。ここいらでは年寄りばかりだが地の人たちは子供の頃からの繋がりで仲良うしとるが、あんたはよそ者じゃ。自治会費は納めて貰うが役はやらんでもいい。回覧板も十分も離れた山の中までは回せんが集会場のポストに広報は入れとくから何時でも来て持っててくれたらいい。ゴミやらの集積場は利用してもらってええ。万が一の時には手も貸す。それでええかね」

何代にも渡ってこの地に暮しているという自治会長がこの家に越した翌日には訪ねてきた。わたしにとってはこの地に居住するのは長くても一年半。外に出ることはその八割もあれば良い方なのかもしれない。ただでさえ病を抱えての余生を近所とのトラブルで過ごすほど無意味なものはないとばかりに『よろしくお願いいたします』と恐縮そうな顔を作って頭を下げた。

元気な内にと、三日を掛けて各部屋の掃除を入念に済ませた。その間に、障子紙と襖紙をネットで購入し貼り替えも終えた。虫除けの網戸の張り替えには手間が掛かったものの何とかやり遂げた。次は、庭の手入れとばかりに除草に汗を流した。さらに、陽当たりの良さそうな二十坪ほどを選び、鍬を入れ何とか畑らしく見える迄になった。ここまで来るのに二週間を費やすことになった。翌日、麓の農協に野菜の種を買い求

めるべく出掛けた。荒れ地同様に、好き放題に伸びた雑草地が畑へと姿を変えていくことに喜びをみいだしていた。畑を耕しながら、自然界に時を成しているのは人間だけではないと頭では理解出来ていた。しかし、その結果が山ほどの買い物に繋がるとは想像さえも出来ていなかった。

昼過ぎに、荷台がいっぱいになるほどに資材が積み込まれた軽トラックが坂を上がってきた。農協の職員が、買い求めた資材を降ろすと早々にわたしは畑の四隅に杭を打ち付け鉄パイプを立てた。パイプの先端にワイヤーを括り付け、対角線上にワイヤーを張った。さらに、支柱としての鉄パイプが力の均衡を保てるようにと、ワイヤーを鉄パイプの先端から対角線の延長線上の地面に径が十三ミリ、長さ五十センチの異形鉄筋を打ち込んで先端の輪っかへと繋げた。四本の鉄パイプの支柱に網の袋をかぶせるかのようにして鳥獣の侵入を防ぐことが出来れば、畑を耕し種を蒔くことが出来る。一週間もすれば芽を出す野菜もあるが、この蚊帳にも似た対策が成されていれば野鳥についばまれる事もないらしい。絵図を片手に農協職員に説明を受けた通りにできたものの二日を掛けての重労働となった。

定年を一年残し、退職をしてからこれまでに毎日休むことなく朝から夕暮れまでこれほどに汗したことは無かった。あとは、時折除草をしながら水をやれば出来映えはともかく何かしらの新鮮な野菜を口にすることはできる。わたしは、明日からは磯辺に出掛けて釣り糸を垂らすことを楽しみに床に就いた。

翌朝、水平線の向こうに朝日が昇りかけるのを目の当たりにしながらわたしは針先に畑で捕まえた太いミミズを付けた。餌箱の中には数十匹のミミズが絡まり合い団子状態になっている。特に何かを狙って竿を出しているわけではない。釣れ無くても何ら問題はない。竿の先の浮きを見ながら魚がミミズに興味を見せて海の中に引き込むのをじっと待つ。その待っている時間が楽しいとばかりに水面を見つめている。釣れた、釣れないは単にその結果でありわたしはそれほどに重要視はしていない。もっとも、釣れればわたしにとって重要なタンパク源であることも間違いはないが、大漁ともなると、それほどに大きくもない我が家の冷蔵庫には入りきらない。独り暮らしのわたしには食べ尽くすこともできない。ならば干物にでもと思わぬわけではないがそれとて同じことだった。

結果として、釣れてもそのほとんどはリリースする

ことになる。
　この地に移住してひと月が過ぎた。時折、躰の異変を感じる事はあるが幸いにして雑草との戦いの最中(さなか)においても、姿の見えない魚との駆け引き時にも，奥歯を力一杯噛み込みながら息を詰め、堪えなければならないほどの痛みに打ちひしがれる迄にはいたっていない。もっとも、半年もたたぬうちに痛みに顔をしかめるようになるとネットの検索によって覚悟は出来ている。その日までは、若い医師の処方によって手にしている痛み止めを服用することなく貯め込めばいい。さらに、モルヒネ経口薬の処方を依頼するには超えなければならない壁が有る。それでも私は、泣き落としの演技で若い医師の情けに訴えてでも手に入れて見せる。のたうちまわるほどの痛みは必ず来る。そうなれば、若い医師の元を訪れることもままならないことは目に見えている。いずれやってくる、その日のために痛み止めのモルヒネ経口薬も貯め置かなければならない。
　熱かった夏も過ぎ、イシモチやアイナメが釣れるようになると躰を丸めて痛みを堪えなければならないようになった。痛み止めのストックはじゅうぶんにある。この程度の痛みならば半年は賄える。しかし、モルヒネ経口薬はまだひとつき分にも満たない。せめてふたつき分は手に入れておきたいとわたしは計画している。そのためにはこの先においてもひとつきは通院しなければならない。顔をゆがめながらわたしは、この時始めてアセトアミノフェンを躰の中に流し入れた。
　月の内、晴れた日の半分は畑で汗を流し、残りの半分は釣り糸を垂らす。雨の日は、読書三昧。絵に描いたような晴耕雨読の日々が何事もなく流れて行く。もっとも決められているかのように日に二度、激しい痛みにひれ伏しながらアセトアミノフェンに手を伸ばす日々でもあった。
　年が明け、春の足音が感じられるようになると、暖かな陽気とともに庭の隅に植えられている桜の老木に仄かなピンクの蕾が目立つようになってきた。その幹は手を回しても抱えきれないほどに太い。この土地を拓き、居を構えた主が何かの記念にと植えたに違いないことは容易に想像できた。樹齢何十年、いや百年を超えているかもしれない。樹の肌はゴツゴツと荒く、桜皮細工のように綺麗な模様にはほど遠くても、枝は大きく辺りを覆い尽くすかのように四方に伸ばしている。
「十日もすればその下で人生最後の花見が出来る」
　わたしはそんなことを思いながら今日も釣り竿を持

って磯辺へと出掛けた。
今日の釣果はまずまずだった。二十センチを超えるメバルが三匹クーラーボックスに入っている。甘辛く煮付ければ贅沢な今宵の晩酌の肴になる。少しばかりの青菜と二十日大根を添えれば贅沢この上ない。いくら躰が蝕まれていようとも欠かすことのない芋焼酎を思い浮かべる足取りは軽い。
「箕形さん。今日の釣果どうだったね？」
いつもならば、すれ違いざまに取って付けたかのような挨拶をする程度しか縁のない自治会長が声を掛けてきた。
「そこそこのメバルが三匹ほど・・・」
何も応えないわけにはいかない。愛想笑いに添えてメバルがとわたしは口にした。
「メバルか・・・。煮付けも良いが腸(わた)を取って唐揚げにしても美味い」
「じゃあ」
別に忙しいわけでも、家に帰って何かをしなくてはならない用があるわけではない。が、世間話をするのも煩わしいわたしは、軽く会釈をして歩を進めようとした。
「ああ、箕形さんちょっと・・・・」
「何か？」
わたしは、背中に声を掛けられて無視することも出来ず振り向くしかなかった。
「実は・・・。あと、十日もすれば桜が満開になる。この町にも桜の咲く公園はあるが、箕形さんとこほどの立派な桜は近在にもない。毎年、ここいらの年寄りが花見を兼ねて宴会を・・・・」
自治会長の言うには、旧村の顔役たちが毎年あの桜の下で宴会をするのが恒例となっていると言う。しかも、数十年も受け継がれているほどにだれもが楽しみにしているらしい。空き家の続いた五、六年はともかく世帯主がいるともなれば声を掛けないわけにもいかないと幹事役の自治会長がわたしの帰りを待ち構えるかのように磯辺へと続く道を野良仕事をしながら気に留めていたとのことだった。
「ああ、いいですよ。どうぞ、どうぞ」
「そお、ありがたい。よかったら箕形さんも一緒に呑みませんか？」
わたしは笑顔とともに快く承諾をした。
自宅に帰ったわたしは早々にパソコンを開き、ＬＥＤ投光器を四台と三十メートルの電気コード。さらに桜の花柄の提灯十個と電球用のソケット付きコードを

注文した。十万円ほどの出費とはなったが人生最後の宴の費用と思えば安いものである。
　注文をして四日目にそれらは配達された。時折襲ってくる躰の痛みと戦いながらも半日ほどを掛けて飾り付けを終えた。桜の蕾は固いものの大きく膨らんでは来ている。あと、二、三日もすれば咲き始める常態にまでなっていた。薄暗くなるのを待ってわたしは電源を入れた。苦労の甲斐もあって枝に括り付けられた桜模様の提灯は色気を漂わせ、地中に埋め込んだ杭に括りつけたＬＥＤライトによって桜が幻想的な面持ちを放っている。夜桜祭りを彷彿させるほどの情緒となった。
「こいつはいい。今年の花見はこれまでにないほど楽しいものになる。箕形さん申し訳ない」
　一升瓶を下げた自治会長とともに顔役とも思われる男が三人、軽トラック二台でやって来た。どうやら、桜を照らしている灯が麓から見えて酒と肴を、さらにブルーシートと折りたたみのテーブルを荷台に乗せて様子を見にやってきたらしい。
　自治会長と私が話しをしている間に男達は軽トラの荷台からテーブルとシート下ろし、白いテーブルクロスを掛けて宴会の準備を調えた。
「箕形さん、折角だからいっぱいやりましょう」
　勝手にやって来て強引なまでにこしらえたテーブルの上には田舎町らしい料理がならんでいる。私には、久し振りのご馳走ではあったが大歓迎とまではいかない。これが縁で、地元の住民との付き合いが広がって行くことには抵抗があった。だからといって角を突き合わせるのも大人げない。
「いいですね～。ご馳走になりますか」
　仕方がなく、わたしは愛想笑いを浮べた。
　わずかに五人での宴ではあったが提灯とライトは思いのほか場を盛り上げた。
　三時間近くにも及んだ酒盛りは、わたしに取って社交辞令を連発する羽目の場でしかなかった。その上、酔いに任せてわたしの年齢や素性やこの地に移住してきた目的などを矢継ぎ早に質問をしてきた。わたしはその一つ一つに応えなければならない。でたらめで対応するわけにもいかない。だからといって警察の取調でもない。わたしは、出来る限り簡素にかつ、オブラードに包みながら丁寧に応えるしかなかった。
「そお、七十六歳。わしと同じ鼠か」
「東京でサラリーマン。羨ましい。わしなんか中学出て親父と一緒に船に乗って漁師しかしらん。こどもた

ちは皆この町を出て暮しとる」
「箕笠さん、あんたインテリなんやね。晴耕雨読。悠々自適の田舎暮らし。羨ましいかぎりだ」
「そうか、いまでいうバツイチなんか。気楽でいいなあ。わしなんか、かかあに未だにガミガミ言われてこき使われとる」
代わる代わるの質問攻めに耐えながらもようやく照明を落とすことができた。
「いくら田舎でも、酒を呑んで運転はできん。明日片付けに来るから」と、言い残して急な来訪者は坂を下りる足取りのおぼつかなさを見せながらも帰っていった。
翌朝、わたしは朝食を済ませると宴の後始末をすることになった。
「夜中にガサガサ聞こえたのはこれだったのか」
小さな声ではあったが散らかった残骸を片付けながら呟くしかなかった。
畑を網で囲ったのは、猪や狸、さらには野猿の被害を防ぐためであることは農協の職員から聞かされ知ってはいたが、まだ目にしたことは無かった。食べ残しの酒の肴は野生動物にとってこの上ないほどに栄養豊富な餌であったにちがいない。カサゴやメバルの姿揚げ、骨付きカルビに野菜の煮付の残りが煮汁とともに跡形もなく綺麗に食べ尽くされ、空の皿や丼が土の上に転がっている。
犯人がどんな動物なのかはわたしには知る由もない。テーブルと椅子を畳むと一纏めにしてわたしは釣り竿を肩に掛けた。
昼過ぎになってわたしは、釣り竿を仕舞い自宅へと向った。残念ながら今日の釣果はゼロだった。
「箕形さん。昨晩はどうも。後片付けまでさせて申し訳ない」
わたしの帰路を待ち構えていたかのように自治会長が頭を下げた。
「いや、いいんですよ。わたしの方こそすっかりご馳走になって・・・・」
出来ることなら、顔を合せることなく家に帰りたかったが一本路ではそうはいかない。今日も、作り笑顔で愛想良くわたしは応えるしかなかった。
「今日の釣果は？」
「いえ、ぼうずでした」
「じゃあ、よかった。重之(しげゆき)さんがさっき、わしんとこに箕形さんにって持ってきたんだが・・・」
自治会長がスーパーの袋に入った真蛸をわたしの目

の前に差し出した。
「いいんですか？」
「いいんだ。重之さんは蛸漁をしている。思いのほか沢山獲れたと言っとった。まだ活きとるから刺身でも茹ででもええ」
自治会長の顔には、何か魂胆が隠れているかにも思えた。それでも、わたしは遠慮することなく手を伸ばして蛸を受取った。
「重っ」
わたしは、不覚にも思わず声を発した。
「そうじゃろう。一キロ二百はある。大物の真蛸だから。ところで箕形さん。次の日曜の夕方四時から花見をしたいと思っとるんだがええかな？」
「ぜんぜん。問題ありませんよ。天気の方は・・・・」
「予報では問題はない。それで・・・・、ブルーシートを引いて座卓を幾つか並べての花見を予定しとる。人数は二十五人ほど。自治会のメンバーが集る。段取りは三時くらいからわしらでやるから箕形さんに手間は何も掛けるつもりなない。呑むときになって顔を出して貰えればそれでええ」
「わかりました。会費はどうしましょう？」
「そんなもんいらん。大きな顔をして呑んだらええ」
「わかりました。じゃあ日曜日の夕方前ということで」
「それと・・・・・」
会費を出せと言われればわたしも、多少は顔を歪ませたかもしれない。タダならばと、顔が綻んだとたんに自治会長が次の矢を放ってきた。
「実は、婦人会も箕形さんが気遣ってくれた提灯とライトのことを知って、いつもは昼間に近くの公園でやっている花見を是非とも夜桜の下でしたいと言い出して・・・・」
自治会長の顔が申し訳ないとばかりに恐縮しているのがありありと伝わってきた。
「いいですよ。じゃあ、日曜日に一緒にということですか？」
「いや、家のこともあるで自治会中が夫婦で花見して留守にするわけにもいかん。翌日の月曜日に同じ時間ということで。婦人会の会長が重之さんの奥さんだもんで・・・・」
わたしにも合点がいった。申し訳ないとばかりに蛸を一匹差し出しての依頼であったと。
「ぜんぜん。いいですよ。自治会長さんも大変ですね」

わたしは、笑みを保ちながら少し嫌みを込めてはみたものの自治会長に伝わった様子はないかに見えた。
「それで、やっぱり二十五人ほどですか？」
「いや、それがこどもたちも少しは参加するだろうから四十人ぐらいには・・・」
「そいつは賑やかだ」
わたしには、女とこどもたち四十人の宴がどんなものになるのか想像もつかなかった。
日曜日になると、男ばかりのライトアップで浮かび上がった桜の下での宴は予定時間を過ぎても賑やかに行なわれた。夜の九時ともなれば月明かりだけでは足下もおぼつかない。ましてや、久し振りの酒とばかりにたんまりとだれもが躰の中に流し込んでいた。小石に足を取られて転ぶ男が見送るわたしの目に入った。それでも、抱きかかえられながらも立ち上がると大きな声で歌謡曲とも御詠歌とも区別のつかない歌を発しながら黒い大きな塊となって闇の中に消えて行った。
翌朝、わたしはいつもより一時間ほど遅く目を覚ました。しこたま呑んだわりには頭は比較的スッキリしている。躰の中をアルコールで消毒した甲斐もあってかアセトアミノフェンを必要とするほどの痛みもない。庭の畑で取れた青菜と豆腐の味噌汁に冷凍庫に小分保存してある一膳分の飯を飯電子レンジで戻し、朝飯を腹の中に納めた。全国紙の電子版に目を通し終わるころには時計の針が八時を指していた。
「さあて、昨晩の宴の後始末でもするか」
わたしは、声に出しながら立ち上がり外に出ると案の定、食べ残しは散らかり放題となっていた。宴は引き継いだとばかりに鳥獣たちがはしゃぎ回ったに違いない。ゴミと器を分け、樹脂性のコンテナを腰で支えながら食器の片付けを始めた。
私が片付けを始めるとほどなくして、軽トラと軽乗用車が上がってきた。乗っているのは全てが六十歳過ぎと思われる女だった。
「箕形さん、おはようございます。片付けはわたしたちでやりますから」
わたしはあっけにとられて咄嗟には言葉にならなかった。
「すみません。わたしは婦人会の世話役をしている荻下佳代子（おぎしもかよこ）といいます」
どうやら声を掛けてきたのは何日か前の蛸の主のようだった。
「おはようございます。ごくろうさまです」
わたしが挨拶を返すと同時に一緒についてきた女た

ちは一斉に片付けを始めた。食器を片付ける者、汚れきったテーブルを拭く者、ビニールシートにモップをかける者など手際がよい。年に何回かの行事として宴会が行なわれていることが手に取るようにわたしには見えた。女の亭主たちは、昨晩の酒が躰から抜けきれずにまだ布団の中なのかも知れない。予め、宴の後始末は婦人たちの仕事としてメンバーが決められているに違いない。そのお返しとばかりに明日の朝は男連中がやってくるのだろうと容易に察しが付いた。

「箕形さん、ここいらは猪や狸は珍しくもない。この時期はお腹に子を持っているから食欲も旺盛。麓にだって降りてくる。宴会の食べ残しは動物にしてみれば栄養の補給場所としてはうってつけなんだよね」

荻下佳代子は手を動かしながらも饒舌だった。

「そおですか、お腹に子を・・・・」

「ゴールデンウィーク辺りになると子連れで見かけることもあるのよ。ところで、今日も四時頃から支度を始めるけど箕形さんもどお？　歓迎しますよ」

正直な処わたしは迷った。広い庭とはいえ、家の中にまで聞こえてくるであろう宴の賑やかさ。いくら独り暮らしが長いとはいえ侘しさを感じないと言えば嘘になる。少し気になるのは，昨日も勧められるがままに酒量が嵩んでいる。当然のように今日も嵩むことになる。いくら嫌いではないとはいえ躰に良いはずはない。ましてや宴の最中に痛みにのたうち回ることなどは絶対に避けなければならない。わたしは「二日続けては・・・・」と言って丁重に断わった。

「残念ね。折角、お近づきにと思ったのですけれど」

荻下佳代子は残念そうな顔を見せたもののしつこく誘うことなく片付けが終ると下って行った。

四時少し前になって、再び軽トラが上がってきた。男たちの宴会と違って、調理前の材料が荷台にはたくさん乗っている。炊き出しにでも使うのかと思うほどに大きな釜に鍋。さらにはガスコンロや立ちテーブルまでが持ち込まれた。

さすがに婦人会のメンバーともなれば手際がいい。

わたしは畑の草むしりの手を休め、いつしか様子を眺めていた。

座卓ごとに卓上コンロが置かれ、予め仕込まれていたのであろうおでんの具が入っている。焼き鳥の準備がなされ、唐揚げでも作るのか大きなステンレス製のボールが二つ、中には味を染みこませているかのように鶏肉が入っている。すでに洗われた人参、ジャガイモ、タマネギが大きな笊の中に見て取れる。

「あき子さん、そろそろご飯を炊き始めて」
「はーい」
荻下佳代子の声が飛ぶ。小気味よいほどに明るい声の返事が耳に届く。
傍らでは、油が入った鍋にコンロの火が点けられた。今一つの鍋には、ジャガイモ、人参、タマネギが刻まれ投入された。
「カレーライス？」
わたしは、酒席の肴にはと思ったが直ぐに否定した。坂の下からこどもたちの声が聞こえて来た。
座卓の上にはすっかり宴の用意が整っている。三台の座卓は子供用に用意されたものだった。おでんの鍋からはできたとばかりに湯気が立つ。何種類もの菓子が盛られた大皿に紙コップとジュース。唐揚げや焼き鳥も大皿に盛られて並んだ。
「は〜い。カレーライスよ。いっぱい有るからお替わりもオーケーよ」
「いただきまーす」
こどもたちの声が一斉に挙がる。
婦人達のテーブルにも菓子が並べられてはいるがこどもたちのそれとは明らかに違う。属にいうところの乾きものが主体だった。胡瓜に茄子に大根といった漬物も置かれている。焼き鳥に唐揚げが並べられた処で荻下佳代子が婦人会長として乾杯の音頭を発声して宴が始まった。
「箕形さん、こっちこっち」
一度は断わった宴の参加ではあったが、手際の良さに見とれ退き際を逃してしまったわたしは手招きされるままに荻下佳代子と向い合う形であぐらをかいた。
「あちらの席の子供さんたちは皆さんのお孫さんですか？」
桜の下で酒を酌み交わし合っているというよりは会話が中心の婦人たちは六十歳前後かそれ以上である。それに対して集ってきている子供たちはいずれも小学生と思える。どう見てもわたしには婦人たちの子供には見えなかった。
「そうですよ。みんな、将来はこの町を担う大事な宝です」
「今は、どこも夫婦が外で働く。ここいらは農家だけでは生活がなりたたない。もともとは半農半漁だったけれど勤め人の方が生活は安定するし躰も楽。婦人会の花見の時はいつも子供たちの夕飯は一緒にカレーライスと決めているのよ」
わたしの隣に座った婦人が親しげに話し掛けてきた。

「そうですか・・・。子供たちも楽しそうに笑ってますね」
わたしは。愛想良く応えるしかなかった。
「それよか、箕形さん。バツイチも長いのでしょ。婦人会には未亡人もいるのよ。老後の独りは淋しいわよ。丁度良いから紹介してあげる」
「登代子さん、それは良い思いつきだわ。さすがは次期婦人会々長」
昨夜の酒席で行なわれた身元調べはすでに婦人会にも知れ渡っているようである。
「あき子さ～ん。こっち、こっち」
どうやら、婦人会の副会長のようだが、わたしにとってはいい迷惑でしかない。ここでの独り暮らしはわたしには不便でもなければ淋しくもない。人生最後の地として幾つかの候補地を見定めて決めた場所でもある。ましてや、わたしは余命宣告を受けた躰でもある。時折、激しい痛みを薬で耐えながらの日々でもある。そんな男と暮しても女としての安堵を得られるはずもない。
副会長の手招きでやって来た女を座らせるために何人かの女が少しづつ躰をずらした。
「あき子さん、こちら箕形さん。わたしたちのために桜に提灯やライトを。もう少し暗くなったらライトを点灯することに。幻想的で素晴らしいわよ」
「そうなんですか。楽しみです」
「それでね、箕形さんはバツイチで長いこと独りなのよ。サラリーマン退職して老後を海の近くで自給自足の悠々ライフを楽しみたいと移住してきたのよ。あき子さんも独りでしょ。少し頑張ってみたら。歳も近いし箕形さんならお似合いよ」
「やだあ、登代子さん。いまさら・・・・」
他人の人生にずかずかと入り込んで来る婦人会長と副会長に腹立たしささえ感じたものの怒りを爆発させるほどわたしも若くはない。場の雰囲気を変えるつもりでライトアップには少し時間が早いような気はしたものの腰を上げた。
スイッチを入れると同時に歓声と拍手が一斉に湧き上がった。
「さあ、お迎えが来たわよ。こどもたちは帰る支度をして」
ほどなくして、会長の荻下佳代子がこどもたちを迎えに来た二人の影を目にすると同時に声を発した。
どうやら、六時に予め決められた代表の親がこどもたちを迎えに来て集会所でそれぞれの親に引き渡すこ

とになっているようだった。こどもたちは、ビニール袋から溢れるほどの菓子を抱えて帰り支度を始めた。
「ご苦労さま。こどもたちをよろしく」
代表で上がってきた親は、焼き鳥や唐揚げのパックが入ったスーパーの袋をご苦労さん賃として受取るとこどもたちを引き連れて坂を下りて行った。
「さあ、これからが佳境よ。あき子さん唄って。夜桜お七」
子供たちが坂を下りるのを見届けたかのように会長の荻下佳代子が声を掛けるとカラオケ用のデッキにスイッチが入れられイントロが流れた。
だれもが囃子たてるかのようにあき子にマイクを持たせようとする。あき子もまんざらでもないように立ち上がると躰を揺らしてリズムを刻み始めた。
あき子は歌い慣れていると思えるほどに上手いとわたしは思った。
「いつ聞いてもあき子さんは玄人はだしね。後の人が唄いづらい」
などと口にはしているものの、口火さえ切られれば次はわたしとばかりに次々とマイクを奪い合うように腰を上げる婦人たち。楽しみの少ない小さな漁師町の女たちには生活臭に満ちた日々から逃れ、発散の場と化していた。
「箕形さん、次の次は箕形さんよ」
副会長の登代子が強制とばかりに歌本をわたしに持たせた。
昨日の花見の宴会ではマイクを持つことを断れたが今日は一筋縄でゆきそうにもなかった。肺に負担を掛けるようなことは無理だと喉元を突きそうになったが大勢を前にして折れるしかない。仕方がなく、若い頃によく口にした演歌を一曲だけということで披露することになった。
「箕形さん、やるじゃない。今度、カラオケにいきましょうよ」
なぜか、未亡人だと紹介されたあき子がわたしを強引なほどまでに誘ってきた。
「いいじゃあない。あき子さんも歌が上手いし・・・」
副会長の登代子の目配せが何とも意味ありげなお節介もいいところであった。
「申し訳けありませんが、わたしはカラオケにも興味はないし、きままな独り暮らしがしたくてここに移住して来たんで。カラオケは別の人を誘われた方がいいと思いますよ」
言葉は丁寧であっても結果として角のある物言いだ

ったと反省もしたが、山有り谷有りの人生を切り開いてきた婦人たちにはこれくらいの角は必要とばかりにサラリと言ってのけた。
少し座が白けたかのような雰囲気にもなったがカラオケは続き、八時を過ぎると宴は解散となった。
婦人達のだれもが、酔いの回った躰を自分でコントロールすることもままならないかのようにわたしには見えた。ふらつく足取りは、日頃の鬱憤をけちらかしているのかもしれない。
「箕形さん、いろいろありがとう。片付けは明日の朝、男衆(おとこし)たちが来ますからそのまま放っておいてください。狸や猪へのお裾分けですから」
闇の中から、婦人会長の登代子がわたしに酔っ払い特有の口調を投げながら消えていった。
翌朝、わたしはこれまでに経験のないほどの痛みを体中に感じながらうめき声を上げた。二日続けての深酒が躰に良いわけがない。ましてや、声を張るほどに唄えば肺に直接の負担がかかる。もはや、アセトアミノフェンで治まる痛みではなかった。わたしは、痛みを堪えながらも冷蔵庫に保管していたモルヒネ経口薬を口に入れることで痛みから解放されることを願った。
「常習性はない」と、若い医師からは告げられていたもののおそるおそる口にした経口薬は日に三度は服用しなければ効き目はない。わたしは、言われた通りに八時間おきに口に入れた。日本の医療薬は大なる効き目を発してくれた。もっとも、モルヒネ経口薬を服用するほどの痛みは結果として余命が近づいていると教えているも等しい。
「あとひと月か、ふた月」
わたしは小さく呟いて布団の中で躰を丸めるかのようにして躰を横たえた。
外で、わたしを呼ぶ声がする。おそらく、昨夜の宴の後片付けにきた自治会長の声だとは思ったが無視を決め込んだ。
やけに躰がだるい。モルヒネ経口薬の副作用なのかもしれない。結果として昨日は、一日中布団の中で過ごしてしまった。躰は侵されていても空腹感はある。夜中に起き出して、碗一杯分の粥を作り梅干しを口にした。昨日の朝から今朝までに口にした全てだったが躰の痛みは軽減されている。今日の服用は今後に備えて止めるべきだと勝手に判断した。判断基準は至って明確だった。この先いつ、どんなタイミングであの強烈な痛みに襲われるのか検討もつかない。冷蔵庫で眠っているモルヒネ経口薬は四十日分ほどしかない。わ

たしの余命ギリギリの量であると行っても過言ではない。かといってこの先においてあの若い医師のもとを訪れてモルヒネ経口薬の処方を依頼することはない。なぜなら、この先のわたしの人生においてその必要性を全く感じないからである。

幸いにして、過剰なほどのモルヒネ経口薬を必要とするほどの痛みに襲われることもなく、軽い食事や適度な畑仕事をして床に就くことができた。

所詮、痛み止めとして処方される薬は治癒を目指しているわけではない。予想にたがわず、夜中に激痛にのたうち回ることとなり冷蔵庫まで這うことを余儀なくされた。わたしは、痛い痛くないにかかわらず予め定められた時間毎に呑み続ける必要があると悟るしかなかった。モルヒネ経口薬を時間通りに呑めば一時的とはいえ時折、顔を歪める程度の痛みですむ。わたしは、朝の目覚めとともにモルヒネ経口薬を体内に取り込み、その六時間後にはアセトアミノフェンを服用。さらに六時間後にモルヒネ経口薬と六時間毎に交互に服用することにした。けだるさや吐き気をもよおすことはあっても激痛に襲われることもなく躰を動かすに支障はない程度の痛みで日々が過ごせることが三日間のわたしの躰を使った人体実験で立証出来た。この常態でどれほどの時間が稼げるのかは定かではないが、少なくても薬持参の日々ではあっても釣り糸を垂れることが出来る。わたしは、畑を掘り起こし数十匹の大ミミズを木で作った手製の餌箱に入れ、今日も竿を肩に担いだ。

海面は穏やかに初夏ともいうべき朝日を受けて波間から光を放っている。わたしは早々に竿を伸ばし、釣り糸を鏡面ともいえる海に投げ入れた。ほどなくして小ぶりではあったがイサキが釣れた。二匹釣れれば独り暮らしのわたしにはじゅうぶんとばかりにクーラーに入れることなく「大きくなって戻ってこい」と小さく発し、リリースを選択することにした。そして、再び釣り糸を海面へと投げ入れた。十分、二十分、竿先はピクリともしない。わたしの手元には何らの反応も伝わってはこない。仕方なく，竿を揚げると餌のミミズは白く変色し息絶えていた。わたしは、餌箱の中からもっとも大きくて元気の良さそうなのを選んで再び海へと投げ入れた。七メートルほど先に浮かぶウキに目を凝らしてはいるがピクリとも動く気配はない。

わたしがこの地を終の住処とした大きな理由の一つは、何も考えることもなく釣り糸を垂らしながらのきままな生活をと願ったからだった。しかし、それは大

きな間違いであったことに今日初めて気がついた。若い医師からの余命宣告は一年以上は生き長らえることが出来るものだった。あれからまだ八ヶ月とちょっとしか過ぎていない。数日前の激しい痛みにこれまでの処方薬とは違い、最後の手段とも思えるモルヒネ経口薬に手を出さざる得なくなってしまった。二日続けての深酒が引き金となったのかカラオケで肺に負荷を強いたのがいけなかったのかはわからない。が、その日を境にわたしの躰はこれまでとは違った悲鳴を上げるようになった。海辺に浮かぶウキを眺めていると何故かこれまでのわたしの人生が思い起されて止まない。次から次と、まるで映画のエンディングロールにも似ているかにも思える。

ドキュメント映画なのかコメディなのか。言えることは、純愛でもなければハッピーエンドでもない。少なくても万人受けもしなければ面白くもない映画であることに疑う余地はない。

とは言え、最初に登場する名前は主役のわたしだ。その次が両親、さらに四人の兄弟の名前がスクリーンの下から上へと巻かれて行く。

わたしが生まれたのは，戦後の混乱期がようやく落ち着き始めた冬。どこの家庭も貧しく、母親は内職をしていた。父親は家庭を守るために少しでも稼ぎが欲しいとばかりに転職を繰り返し、最後は小さな会社を興していた。だからといって裕福になったわけでもない。そんな親父に一生を託した母は苦労の連続だったような気がする。母親にとって幸せな人生だったのか未だにわたしにはよくわからない。わたしが知っているのは優しくもあり厳しくもありタフな母であったことぐらいだ。今、この歳になると兄、姉、妹に弟、五人の兄弟で遊んだ記憶はないに等しい。仲が悪かったわけではない。だからといって、ベタベタと絡み合う兄弟でもなかった。それぞれが幼い頃より自立心を持っていた。そう育てられたのかも知れない。兄と姉は中学を出ると住み込みで働きに出た。上の学校に行かしてもらえるほどに裕福ではなかったことも事実ではあったが、クラスの半数近くがそうであった時代でもある。金の卵ともてはやされた時代でもあった。

直ぐ上の姉とは五つ違う。五年も違うと時代も大きく変わっていた。団塊の世代の最後と言われたわたしの中学校では、一クラス五十人を超える。しかも、一学年毎に十五クラスあった。単純計算で全校生徒が二千人を優に超える。進級するごとに当然のようにクラス替えが行なわれる。それでも、卒業までに顔も名前

も知らない同窓生の方が多いくらいだ。
小学校に通っていたころの友人の名前も何人か思い浮かんでくる。そしてそれらの友は中学生になっても遊ぶ仲間として続いた。特に仲の良かった五人はエンディングロールに登場しても差し支えはない。
よく遊びはしたが勉強をした記憶はほとんどない。わたしは頭の良い子ではなかった。それでも全日制の高校へ進学させてもらえた。わたしの頃には中学を出て社会に出る子供はクラスに一人、二人の時代になっていた。家庭が貧しい子供たちは定時制高校というセーフネットが張られていた時代だった。わたしのクラスにも五、六人はいたような気がする。今でも憶えている。北川小代子（きたがわさよこ）、クラスで一番成績の良かった女子だった。容姿も悪くはない。いや美人だった。性格も明るく誰とでもよく笑ってはいたが連れだって何処かに遊びに出掛けたりはしない女子だった。母子家庭で家が貧しいことが学校以外での付き合いをしない理由だったのかもしれない。県下に名だたる高校でさえ合格のお墨付きを担任教師が出してはいたが北川小代子は定時制へと進んで行った。傍で見ていたわたしでさえ複雑な思いを抱いていたのだから北川小代子はもっと複雑な思いだったに違いない。わたしの中学校時代でエンディングロールに脇役として登場する名前はこの北川小代子しかいない。あとはそれほどに思いが残ってはいない。何人かの名前は思い浮かぶがエンディングロールにはエキストラとしての名前が挙がるに過ぎない。
わたしの高校生時代には多くの名前が浮かぶ。日曜日だけのアルバイトにも精を出しながらクラブ活動でも汗を流した。
今でもよく憶えている。自宅から学校までの沿線に三階建ての店舗を構えるスーパーで一学年の夏に初めてのアルバイトを経験した。資金力の有る地方のスーパーが他業者を吸収しながら全国展開へと成長のまっただ中の時代だった。わたしは食品売り場の主任に認められ、店頭でインスタントラーメンの呼び込み販売を任された。声を張り上げ特売だと来店客に呼びかける。たしか、一袋が十円だった。まだ、今ほどに多くの種類が有るわけでもなかったインスタントラーメン。半ば強引なまでに買い物篭に放り込んで笑顔を振りまく。客の全てが婦人であった。誰がみても高校生のアルバイトといった若者の呼び込みに嫌な顔を見せる買い物客は皆無だったような気がする。十時の開店から始めてノルマの数字は昼過ぎには達成出来ていた。三

時過ぎからの山場にはすでに空のダンボールが積み上がり、新に翌日分のラーメンが倉庫から運ばれてきた。もっとも、時給がプラスされるでもなく何かの特別手当が出るわけでもない。

「いやあ〜、箕形君。これまでにないほどの売れ行きだ。君の都合でいい、何時でも時間が空いた時にタイムカードを押してくれればいい」

時給における待遇はなくても自由出勤はわたしにとってこれほどに有りがたいものはなかった。

クラブ活動を優先しながらわたしはアルバイトに精をだした。

わたしの家はけして裕福ではない。

「学費と通学費は出すが小遣いは自分で稼げ」

これが父親から突きつけられた高校進学の条件だった。店舗に張られたチラシを見てわたしは飛びついた。その結果、こうした待遇が得られた。店舗内ではちょっとした有名人だった。特売呼び込みでの成績は常に群を抜いていた。店長からも声を掛けられるようにもなっていた。

バイトを始めて二ヶ月ほどが過ぎた。驚いたことに仕事を終えて電車を待つホームでわたしと歳の変わらない女性が声を掛けてきた。

「箕形君だよね。わたし、惣菜コーナーに務めている落合真依子。わたしと付き合ってくれない？」

産まれて初めての経験だった。

「・・・・、申し訳ありません。僕はあなたのことを知りません」

今でも憶えている。あまりに突然のことにわたしは敬語で接していた。しかも、同じ方向の電車に乗り、降りるまでず〜とだ。

今だからこそ言える。「つまんない男」と彼女は思ったに違いない。話しを聞くと、彼女は高校の推薦を受けて十人ほどでこのスーパーにテナントとして入っている業者に就職したばかりだった。わたしの家の二つ先の駅近くの寮住まいとのことだった。わたしが歳下であることは察してはいたものの一年生だとは思っていなかったようだ。

「僕はここの駅で降ります。お疲れさまでした」

「ごめんね。驚かせて」

次の日曜日、わたしはタイムカードを押すと惣菜コーナーへと向った。

「おはようございます」

「おはよう。今日も元気に頑張って」

「はい。ありがとうございます」

素知らぬ顔も出来ないとの思いから彼女を探し、朝の挨拶を交わした。それ以上でもそれ以下でもない。

「箕形君、真依子ちゃんを振ったんだって。あんな良い女をもったいない。後悔するよ」

休憩時間に、パートの主婦たちからひやかされたのを今でも憶えている。

その後も、何人かの女性と知合ったものの深い関係にまでは進むこともなく、今となっては全てが脇役としてのエンドロールへの登場でしかない。

準主役としての登場は結果として別れた妻の美也子と娘の琴音となる。別れた原因はわたしにある。属に言うところの浮気であった。情けないことにハニートラップの罠に落ちてしまったことが原因だった。高校しか出ていないわたしが、大卒者と渡り合うにはそれなりの努力と度胸が必要だった。見栄をはることも厭わなかった。当然のようにそれに見合う稼ぎも必要だった。わたしは、いくつかの会社を渡り歩くことで収入と地位を上げていった。キャリアウーマンの大学出の美也子と恋に落ちたのも見栄がなかったと言えば嘘になるかもしれない。子供が出来、籍を入れることになった。まだ、出来婚という造語がなかった時代でもある。

わたしは美也子を愛し、琴音を可愛がった。仕事においても順風満帆だとの気の緩みが出たのかもしれない。競争相手の企業が差し向けた美女との酒の席で不覚にも酔い潰れてしまった。目が醒めたのはラブホテルの一室だった。わたしには、それほどの記憶は無かったものの男と女の関係に至ったことを否定できるほどの聖人君子でもない。一週間ほどすると、何枚かの写真を見せられ会社の情報を持ち出せと要求された。

わたしの人生で、これほどの敗北感を味わったことはない。その日の内に会社に辞表を出した。定年までにはまだ一年残っていた。いや、役員昇格の内定を受け、さらに五年の雇用延長さえも約束されていた。

美也子にも突然の退職に至った事情を話さないわけにはいかない。

「情けない。馬鹿なの？　大卒には絶対に負けないって見栄を切っていたのは何だったの？　所詮は高卒だってことなの？」

わたしにも意地があった。何もかも捨てることにはなっても罠には負けたくない。だから、辞表という手段に出て要求をはねつけた。キャリアウーマンとはいえ、美也子の稼ぎよりはわたしの方が多かった。これまでの生活はわたしが支えてきたという自負もあった。

しかし、それらは一瞬にして吹っ飛んだ。美也子にしてみれば琴音は大学三年生である。離婚が子供に与える影響もそれほどに考慮することも無いとばかりに離婚届を突きつけてきた。自宅と退職金の半分を手元に残し、残りの資産全てを慰謝料として美也子に渡した。

わたしの一生を映画に見立てればここが一番の佳境だったような気もする。その数年後、美也子はアメリカ人と再婚し、琴音を連れてオレゴンへと移住した。いまでもわたしは、二人が元気にやっていることを願っている。

海面を漂うかのように見えていたウキが一瞬で海の中へと引き込まれた。同時に竿を握る手に強烈な圧が伝わってきた。わたしはここぞとばかりに竿先を上げ、魚との駆け引きを始めた。間違いなく大物が掛った。アドレナリンが分泌され、躰中に回っているのが実感できた。我をも忘れ、懸命にリールを巻き上げたり緩めたりの格闘の末、五十センチはあろうかというクロ鯛が上がった。やっとの思いでクーラーボックスに納めたところで気が緩んだのか、これまでにないほどの痛みが全身を襲った。慌てて、モルヒネ経口薬を服用したが息も絶え絶えの躰の痛みは一時間以上続いた。

やっとの思いで家にたどり着いたわたしはそのままベッドに倒れ込むしかなかった。大物が掛ったことで一気にアドレナリンが吹き出したことが痛みを誘発したことは間違いなさそうである。今度、同じ事が起きたならその時がわたしの人生の終焉であり、ＥＮＤマークがスクリーンに映し出され真っ黒なスクリーンと化す時だと覚悟した。最後の幕は自分の手で降ろしたい。この地に移住すると決めたときからの思いでもある。

翌日、わたしはベッドから起き上がることはできなかった。

翌々日になっても、痛みが治まることはなかった。幸いにしてうめき声を上げてもだれかに届くこともない。奥歯がめり込むほどに歯を食いしばることで痛みを耐え、ベッド中でのたうち回りながら気を逸らせる戦いを余儀なくされた。

四日目の朝、痛みが治まりを見せ始めた。わたしは、竿を担いで磯へと向った。

五日目の朝刊の片隅に、磯辺で男性の溺死体が上がったと小さく記事が載った。おそらくは誤って海に落ちたのだろうと書かれていた。

完